

冬の山へ、少女に切符わたして出た街が行きあたり  
 枝おろす切口が白く、てけふが冬至  
 松山砂山松露山を通り市へゆく  
 あぶは羽があつてくる藤の花たれさがり  
 はれてはるかに山の雪山のひだり  
 雪、雪、両手にうけてゐるみんな子供  
 枯木、やせたからだがせきして通る  
 雪月、蔓の根のくず粉解きをる  
 何も云はず麥ふむ心になつて節分がけふ  
 冬雲がしろいてぶくろのかたつぽは脱いてさよたらする  
 ぼかぼか蹄たんぽぽさくよ  
 學ぶこゑともしてゐる  
 月は十日ごろの櫻のところどころある道  
 向うに病院が花時の風のある噴水  
 めうがのめのうるはしさもふるさと  
 ふるさとはこんなよい月夜のとうがらし  
 冬山の雨にぬれた粗朶が下りてくる  
 富士が白くて焼ざかひ冬木二三本あると椋鳥  
 寒月を枯枝にかけてみてゐる  
 樹が石をいだいてゐる茂り  
 腰に手を麥ふんで横にゆく膝のまがり  
 あられ、笛ふいてゐるのが交通巡查  
 枯枝に三日月さま生きの日も長くあるまじ  
 大根あつぎりにして煮えてゐる雪になるとか  
 溝にどじよみがひげはやしてゐる墓地のあたり

鷲見冬青  
 細谷野路  
 村上二丘  
 降矢百峰  
 巢山咲魚  
 栗栖ひろよし  
 南川鴻亮  
 浅井冬二  
 山田梅軒  
 小西佛舍利  
 原實  
 川上湧泉  
 平位青水

里村にはいつてから陶房へしんの細道——  
 いつか俊二が足をふみはづして、小流へト  
 ランクをおとしたといふ其のへん、殊に足  
 許あぶなく、やうやくにして北朗陶房に  
 着、内君は隣組の寄合ひで、留守だつた  
 が、私の寢床は二階にしておいてくれて  
 あつた。  
 (四月二十七日)

×

九時、長野發。車中の混雑、物すごく、  
 二等三等の別などありはしない。出入口か  
 らは到底降り出来ず、皆窓からする。そ  
 の窓からも「もうはいれないぞ」と中から  
 押し返すやうにする。それを「どうか頼む  
 頼む」と外の一人が云ふのを、窓側の男が  
 「では一人だけだぞ」と許すと、いきなり  
 大きなトランクを押し込んでよこす、「荷  
 物があつては駄目だよ」と云ふまに、しや  
 にむに入り込んできてしまふ。中の者みん  
 な立つたまゝヘンヤゲたやうに壓しまくら  
 れる。と、今はいつてきた男が、「このト  
 ランクへ腰かけて下さい」と云ふ。大きな  
 腰掛が出来たので二三人、ヤレ〜と助か  
 る。昔の諺に曰く、「情は人の爲ならず」

×

糸魚川に来て車中檢札がある。それと共  
 に車中、スウツとなつて、はじめて窓外を

負けても名月の、談が何のかのとゆで 豆の皮  
 もうよくなりました小米花一枝いただきます  
 川を渡ると一軒梅が花をつけてある白い雞  
 子供達白い綿つみためてある女先生がやさしい若さ  
 此の道けふは母の墓へは行かずには白い茶の花戻る  
 驛から坂になつていつもの道元日を行く  
 鏡餅もひわれて夜は静かなみかんのいろも  
 インク製造所に雨がふる桐の花、しづく  
 きいろいろチウリップは年寄りの部屋にお茶が入ります  
 ともかくここを假りの宿として勤めに出る櫻まんかい  
 葉 櫻 の 月 夜 の 夜 釣 り の 灯 か  
 朝鮮の山もからすも今ごろ青磁の空のふかさか  
 雨あがればまつつすぐに、麥のうね麥の芽  
 昔の儘の家々や坂を下りると寺や春近い日射が根津逢初あたり  
 ガクンガクンと電車がきて行つてしまふと冬の雨ふるばかりバラックばかり  
 住みつけばここにもお玉杓子がある  
 風 が 月 夜 になつて みる 吊 橋  
 みぞれ ふる 島 からの 魚 賣りにきてある  
 酒 倉 に ふる 雨 べん ぺん 草 に ふる 雨  
 日に日に 落葉 ふきたまり 月夜にしてある  
 雪が来さうな 塵箱の 蓋あけて ある  
 熟はない 冬ぞらの うつくしい ことなどいふ  
 くすりの さぢの やうな 朝月の 枝々ばかり  
 墓石の やうに こんなに 金庫が 焼跡の 夕焼  
 なづなの花やある けてある かす子どもに 石ころ

平岡國次郎

井形春一

須賀仲一

天沼棗人

金平二火

中谷操

遠藤虹水

前川紅二

濱武ゑみ子

佐藤鈴村

伊藤みどり

齊藤比斗子

眺望する氣持となる。日本海、浪おだやかにして、北陸の春、いかにものどかである。市振あたりは、砂濱に麥が青く、雲雀でも鳴いてゐさう。……

×

一四時半、富山に着。去年五月に来てから、丁度一ケ年。その間に、富山のかはりやうは……。だが、焦土の中に建てられたバラックは東京よりも氣が利いてゐる。又、數もさうとうに多い。これは、東京邊とは違つて、復興用の木材が手近の山にある爲であらう。驛前には「日の丸旅館」といふ、バラックとしては過ぎた位の旅館も出来てゐた。そこに同人が集つて、座談會——良太郎、竹里、實治、向洋、政二等。富山の同人として戦災ぎせい者は藻谷六郎。彼は印刷業。それと共に「層雲第十八句集」の原稿と組版とが燃えてしまつたのだが、この方は、改めて今松本市で再組版中なのである。

×

夕刻より良太郎、案内して上市へ。こゝは戦災を免れたので、青葉もあり、瓦屋根もあり、白山連峰の眺望もあり、焼跡から來ると、「ありがたい」と思ふ。こゝの野崎サンといふ宅で馳走になる。家の雅名を

たつぷり降つて星のふるやうな雫してゐる  
海が白浪たててだんだん日のつまつてくるトンネルの口  
サボテン白い花つけてよい人があつたら世話してくれといふ  
ぬれれて月の窓が芽をふく

佐藤逸仙子

夏堀望子

なれては薪割ることもをんなの手にて、うぐひす  
青空市場も春浅し皿に盛つたいなごの煮たの  
椿のつやつやと來て飛んで頬の白いほほじろ

永谷青史

乾燥野菜よく乾くのでつくろふ足袋も  
夕日枯蓮子をのせて棹さしてくる  
雀枯あしにゐて沈む前の日が水そめてゐる

角田重信

雪ぞら耕してゐる人に頭さげてゆく  
ふたりきりのまだ青いみかんではある  
花のあめになつてしづかな

遠藤源治

秋晴れ、言葉は通じない異人さんとゐる  
病んで病んで生きてきたことも朝はうぐひす  
どの星も暈をもつてゐる春夜の松の木

三浦清一

もえて失くなる星はあつて深夜星がいつぱい  
水田に水田のつらなり春浅き雲のゆきき  
冬夜の聖書に並べてわたしの湯呑である

近藤次良

月がみぞれになつていく庭木の枝と枝  
ないことはないはづのものからすが來て鳴く  
手が足のうら洗つてやつてゐる

矢内樹一

きつう拍車を入れ吾妻裾原春  
くまなき月は湖のおもて  
陸橋けふは雨のふらなかつた蝙蝠傘さげて歸る

木村幸雄

つけてほしいといはれたので、「對七十二  
峰樓」と命名。白山連峰は七十二峰あると  
云ふからである。上市ホテル泊。(四月廿  
八日)

×

七時上市發。富山で乗換へて、十一時半  
丸岡着。こゝに故内田創平の家族の方々、  
葵の會幹事の諸君、出迎へられて、電車に  
て丸岡町へ——創平の宅におちつく。創平  
と云へば、層雲の舊い人々はよく知つてゐ  
られよう、作家としても相當に振つてゐた  
し、又、麻布に住んで、層雲社へは殆ど毎  
日のやうに出入してゐた時代もあつたか  
ら、東京同人間には忘れられない人であ  
る。彼は日支事變に召集されて中支へ赴  
き、恙無く歸還したが、其以來、病を得  
て、とう／＼物故した。今年が三周忌にな  
る。私は、彼の生前、彼の家を訪ねようと  
約束してゐて遂に果さなかつた。今度は、  
その供養に列席する爲に來たのである。創  
平は、ずつと床につくやうになつてから  
は、裏の庭だけが彼の目をなぐさめるもの  
ともなり、唯一の詩材の庭ともなつた。彼  
は歿後に詩集を作つて、其題は「裏庭」と  
してくれと遺言したさうだ。その庭には今  
松の木の下につつじが咲いてゐて、そこに

いても畑いもにほどよい雨の傘さして勤めにゆく  
 かけが霜がとけとる木のかけ  
 春が吹雪いたり浪音が松にちる雪だつたり  
 頬かむりしても枯木に日の落ちるみち  
 春を待つ日の豆なら煮えた  
 日南日かげとくつきりと春の日植木鉢  
 なにごともなかつたやうななみは岩に絡んである  
 あるじの坐るところへあるじがすわり楷燃えてある  
 墓には日だまりのまだ梅に早い小鳥が来てある  
 風ふく灯火は木の葉のまだある林  
 三四人焚火圍んで仕事場の霜がまだ日の出前  
 けふは曇りて八ッ手の花眼科醫院休診  
 寺の畑のはねつるべ井戸と遅い梅が盛りのお月夜  
 せきれい朝は白い胸を張りお山の雪うつす水べ  
 霜とけたあちら大根つけた馬通る日和  
 柿の葉のたばこです窓から見える柿紅葉です  
 まいにち砂とりがゐる砂山のあたりつくしんぼう  
 子に逢ひにかへるみちのけふはあたたかな豆の葉  
 争議もとにかくはたらくほかはなく道のでふてふ  
 ここに雪に炭焼がま二つ竝んではれてゐる  
 ごつとりごつとり水車がまはつて日の照つてゐる朝  
 杉山さうして松山、川上から川下へ霧はれてゆく  
 けふ秋の雲一つ、青とんがらしの種のつぶつぶをほす  
 秋の蝶々、こまかいいてゐる白い雲がかけるほど通る  
 満月はすぎても落葉した櫛の木の月夜寐るとき

島山實治

關口江畔

木村乙羊

坂部蝶三

大橋さかゑ

長塚千里夫

長山林二

菅崎道雄

碑にするほどの天然の石があつた。それで  
 彼の句碑を作ることきめた。座敷の屏風  
 に貼まぜにしたものゝ中に彼の短冊が一枚  
 あつた。

花がちつて雨ふつてゐる桃の木

此の句を眞跡のまゝかく大して刻したら  
 ばよいではないか、と私は云つた。或は、  
 私が書き直してあげてもいい、とも云つ  
 た。

彼の書齋には舊い時代の層雲關係の書物  
 が澤山、そのまゝにしてあつた。その書齋  
 は病室になつてゐたらしい。私は、けふは  
 疲れたので、まだ同人達が座敷で談してゐ  
 るうち、さきに失敬して、其の書齋に床を  
 とつて休ましてもらつた。床の間には、私  
 が桂子と結婚した時の祝の禮返しに書いて  
 おくつた扇面が表装して掛けてあり、山吹  
 の花が生けてあつた。凡て凡て夢の如し。

(四月廿九日)

午前中、福井中學校へ講演に行つて歸  
 る。法榮寺の創平の墓に詣る。午後、自宅  
 にて讀經供養。位牌に戒名をかいてあげ  
 る。

文明院創平日忠居士

柄本よし雄

佐藤専子

日向野秀策

森田十雨

齊藤てつ人

照井燈光

わららにほ雪の残り月のかげさしかれあしにふるからかさなる雨となりてもどりとほ、月夜のとおくでもおまつり線路を犬つれた女がゆく海へ傾いてゐる日ざしまつたぐい月夜の木が門のうち、そとはつきりと三日月うすらとまるところが見えてゐて秋生え揃つて畑麥ひつそりと雨がやんでゐる富士へ舐むけて寒の浪けたててゆく寒の水なら目高が三びきよいひなたくんでつるべのはなびら枝からもちる橋のたもとから村すげ笠うりがきてゐる麥の穂にやどるほどな雨をからかさ牛につんでしぐれる松粗朶のすこし青い葉今宵ちよつと甘し明日はたしかに元日の甘酒多田寺へ九町とある石、水車米ついてゐる水へ雪はれの雪掻き落とす舟のマスト雪折れの枝は雪に梅が咲いてもありさうな胡桃一ところげてゐる巖冬假の住居に雪の最上川流れてゐる明け暮れ春日をひざに麗はしのこの豆、種にしよ新圓の話など冬葱の黄色なる芽をむき冬の朝ははれてとやのにはとりうちそとにゐる屋根の傾斜が火の見やぐらのしたで月夜です雪解日の照り牛ひいて女が通るふきのとう、女もするなる投票にゆく

手向の句――

裏庭といふ集の其庭も春の行くころ

夕刻、創平宅を辭去。案内せられて蘆原温泉に行く。べに屋といふ宿は大きくて、庭もよろしい。こゝに、葵の會同人――秀洋、愚村、一年、迂人、龍華、如水、小芳等、十餘名集つてゐて、句會。會後、五人私と共に泊る。  
(四月三十日)

蘆原温泉を出て、東尋坊へ。――東尋坊は北陸奇勝の隨一として、旅行の客の必ず尋ねるところだ。戦争以前は桃色の遊覽バスが出てゐたといふが、今は三國港から二キロばかりを歩く。雨がポツ／＼と降つてきた上に、風が強い。一體、東尋坊は怒濤が巖壁に打ちかゝる壯觀を賞するので、餘りに浪の高い日は危険だといふ。尤もそれは西風が強いと浪が高くなるのだが、今日は南風だから却て静かだらうと云ふ。果して、其の通り今日は浪は殆ど無く、その爲に奇勝が一如に奇勝ではなく、たゞ、柱狀節理をした安山岩がニヨキ／＼と壁立してゐるだけのことである。尤も、月夜にしたらばいゝかも知れない。同行の一人曰く、此のへん、もとは松林があつて、若き

皆川 蓼二

酒は風吹く日のかいつぶりは二羽で  
ほんがり焼けた串魚に味噌をぬるとて  
己が焼く炭爐に盛り濁り酒どろりとよろし  
甘酒の出来のよろしさは老ひませり  
陽がてると霜とけ道蝶一枚さげてる  
柚子風呂にゐて柚の木月があかるく  
詣でて梅にはまだ早いわにぐちのひも

高崎 貞之

骨とやせたからだがかゆいとてかいたる  
朝日のさすまへの水に咲いとる  
指が指にもてあそばれてゐる 幸福  
自給自足の畑の隅の隅の炭がまのすなほなる煙  
一羽ゆくに夕空の雪山のうす紅きを  
紅梅の林ほのかなるかんの雨はれる  
冬の日おちてしばらくは明るい雲の遠くの鳥々  
晴耕雨讀の、本を開いて椿の花にも雨ふる  
梅さいて梅のない家はない碧い空かな  
淡くしてたしかに月かげあるしるじろと梅  
おまつりちかづく笛きこえこのごろの今夜もつきよ  
よあけまへのほのかさのみえてあればあるいさり火  
雲もあかるくなつてある空へ萱やねの一二軒  
鳥の啼いて居つた雨ががり梅が遠くにある  
川べり赤ぼけのした杉の木今時分降つた雪の學校子供  
冬の間のまがりくねつて居つた柿の枝の梅が早速咲く  
これを着て居るとこれが放せないほどあつたかい冬の人の顔  
雪がすぐうすらひでしもう青麥海が見える

佐伯 美則

片岡 樹裏人

吉澤 稻市

ないかと拜察する。下鴨神社の縁は目にし  
みるばかりに美しい。此の境内にある矢  
代書店編輯部をたづねて、店主、矢代サン  
と、舊友、小牧健夫君とに會ふ。それか  
ら、廣道の吉富樓にて素食。即事三句――

○ 松に藤の花、天皇は舊居へこそと

○ 藤の花けふ君と、いくさは夢のやうな

○ 藤を見て奥へ、百日紅の若芽だつ一間

× 昔通りに悠然たる京阪電車で大阪へ――  
市電と高野電鐵にて長野町へ――途中、迎  
へに出てもらふ筈なのに、仲一との連絡悪  
くして（後に一通の電報は誤信、一通は遅  
着と判明）ひとり、洲濱といふ小さな驛へ  
お入り立つた、既に八時。とにかく、仲一の  
勤めてゐる国立病院の道をきいて行く。病  
院へ歸る白衣の一人が、一緒に行きませう  
と云つてくれる。此人、脚が悪いので、ソ  
ロ／＼と行く。三日月が出てはゐるが、暗  
い暗い道。やうやく病院にたどり着いた  
が、仲一は既に退出後にさつぱり要領を  
得ず。今さら、何處に宿をとることも出来  
ないので、病院の宿直室にとめてもらひ、

背に陽をうけて仕事にゆく  
中村苦味生

えんどうののびたことも妻と雨の少し降つてやんである  
餅がこどゆにふくれてあるところへかへつてきた  
おばあさんひとりある山の茶屋のしろいたまごをむく  
ふきのとう二つ三つでてあるお二人住んでゐられる  
雪に日のさす湖に棹さす景色、旅する  
零度をくだる星の降りてあるころのシグナル  
霜の畠の中の學校、霜の道そろそろ通る  
貝がら山がすいて見えて片側街の川ぞひ雪どけ  
みちみち月があつて先生のうちの梅の花白い  
山鋸もろ手もてひく木の匂ひがぞんぶん春  
木を挽くわたしに代る吾子のまたわたしが日の永く  
けさ遠くまで麥の芽の青い寒の雨あがり  
いわしの頭とひいらぎは明るいうちに挿してこんや年越し  
地搗やさん焚火をかこみ寒明けの雨がふり出してある  
淋しさは屍體室の屍體凍らせておき月夜をかへる  
親にそむくことも碧い空に梅をさかせてある  
あたたかい風がある碧い空がある義理といふものがある  
不孝な子であることも何と碧い空から散つてくるはなびら  
ピアノが明るい月を奏でてある坂の道の明暗  
麥の芽埋れるほどは降らぬ雪の陽のさしてくるかけ  
麥の芽ちよつと出てある雪の鳥の歩いて行つたあと  
もう一度寒い日の来さうなあなたかな日のお濠のさざなみ  
日本人はわたし一人の椅子があるのですわる  
無事であつた手袋をはめる  
(其所にて)

(綠平氏居)

北田山口彦

名雪理輝

木庭皓龍子

上野忠三

に赴いて、その三輪信一氏別邸に泊。  
(五月二日)

青葉に雨、しづかに休養したいやうな日  
だが、京都に打合せがあるので朝のう  
ちに出立。汽車が琵琶湖畔に出る頃、雨は  
はれて水光うららかに、田にはげんげがジ  
ウタンを敷いたやうだ。三時、京都に着  
く。京都は、焼かれなくて、ほんたうに好  
かつた。日本の風景の爲に……だけでも、  
しあはせだつたと思ふ。五條の鳥津工場の  
萬來舎に宿がきめられてゐた。萩、鏢一と  
三人にて、心やすき鍋を圍んで夕食。それ  
から、夕暮の嵐山へ散歩に行く。すつかり  
暗くなつた渡月橋をわたり、虚空藏寺の下  
にT氏を訪ねたが留守。河鹿はまだ鳴かず  
螢はまだ飛ばぬ嵯峨ではあるが、青葉の匂  
ひは夜氣の中にかんばしく——京都は焼か  
れなくてほんたうに好かつた、ともう一度  
思つた。  
(五月二日)

御所の新緑に藤の花が美しいと聞いて、  
それを見に行く。若葉をうつすやうな御所  
の白い壁、そのすそを流れる御溝水。陛下  
は、さしがしい東京の宮城よりも、かうい  
ふところへ御住居になられるのがいゝでは

皆川 蓼二

沼は風吹く日のかいつぶりは二羽で  
ほんがりが焼けた串魚に味噌をぬるとて  
己が焼く炭爐に盛り濁り酒どろりとよろし  
甘酒の出来のよろしさは老ひませり  
陽がてると霜とけ道躑一枚さげてくる  
柚子風呂にゐる柚の木月があかるく  
詣でて梅にはまだ早いわにぐちのひも

高崎 貞之

骨とやせたからだがかゆいとてかいたる  
朝日のさすまへの水に咲いとる  
指が指にもてあそばれてる 幸福  
自給自足の畑の隅の隅の炭がまのすなほなる煙  
一羽ゆくに夕空の雪山のうす紅きを

佐伯 美則

紅梅の林ほのかなるかんの雨はれる  
冬の日おちてしばらくは明るい雲の遠くの島々  
晴耕雨讀の、本を開いて椿の花にも雨ふる  
梅さいて梅のない家はなない碧い空かな  
淡くしてたしかに月かげあるしろじろと梅

片岡 樹裏人

おまつりちかづく笛きこえこのごろの今夜もつきよ  
よあけまへのほのかさのみえてあればあるいさり火  
雲もあかるくなつてある空へ萱やねの一二軒  
鳥の啼いて居つた雨ががり梅が遠くにある  
川べり赤ぼけのした杉の木今時分降つた雪の學校子供  
冬の間のまがりくねつて居つた柿の枝の梅が早速咲く  
これを着て居るとこれが放せないほどあつたかい冬の人の顔  
雪がすぐらすらひでしもう青麥海が見える

吉澤 稻市

ないかと拜察する。下鴨神社の縁は目にし  
みるばかりに美しい。此の境内にある矢

代書店編輯部をたづねて、店主、矢代サン  
と、舊友、小牧健夫君とに會ふ。それか  
ら、廣道の吉富樓にて晝食。即事三句――

○ 松に藤の花、天皇は舊居へこそと

○ 藤の花けふ君と、いくさは夢のやうな

○ 藤を見て奥へ、百日紅の若芽だつ一間

× 昔通りに悠然たる京阪電車で大阪へ――  
市電と高野電鐵にて長野町へ――途中、迎  
へに出てもらふ筈なのに、仲一との連絡悪  
くして（後に一通の電報は誤信、一通は遅  
着と判明）ひとり、洲濱といふ小さな驛へ  
おり立つた、既に八時。とにかく、仲一の  
勤めてゐる国立病院の道をきいて行く。病  
院へ歸る白衣の一人が、一緒に行きませう  
と云つてくれる。此人、脚が悪いので、ソ  
ロ／＼と行く。三日月が出てはるが、暗  
い暗い道。やうやく病院にたどり着いた  
が、仲一は既に退出後にたつぱり要領を  
得ず。今さら、何處に宿をとることも出来  
ないので、病院の宿直室にとめてもらひ、



水にうつつて降りやんでぼたん雪となつて日が暮れてゆく

三好叢一路

それから木炭は一俵つつ負うて雪のみつつまたの咲くみち

繩なふきかいが繩なふてゐるチラチラ止む前の雪に日が照り

ちらりちらり降つてきて川が流れてゐる

夕方は陽に向いて墓が澤山あるそのへんがもう春

小さな虫がおくびよるな觸角で觸つてゐる春かな

一番の汽車が水にうつつて通り朝日赤茶けた杉の木

学校の古い松女の子の一组が體操してゐてその先生

さくら、蝶さげて女通る袖なしきてゐる

わんわんにやごにやごももうわらやすつかり春である

ぼたんゆきぼたんゆき供出米の櫛をすべらし

山のさくら城のさくら吊橋のあるそだ負うてくる

ゆき山ゆきばれ皮やさん兎の皮買ひにきてゐる

お堂の松がしんを立てて夕日が遠くの佐渡に

魚場町に湯のあつて夕方人が通ります杏の花

櫻が法然庵のある横町格子戸つばめきてゐる

山のなかの湯が下にある山の道月夜になつて明るい道

果物籠をもつた異人さんの子もみづうみのある山の木立が夏

木がしひたけださせてゐる月の光がとどいてゐる

月の白い道が岬の白い波になるところ巖

海がないでひとまはりしてきてひるのかれひのしらやき

雪にころびなにかたのしくて雪にかけてゆく

月がすこし厚みもつてきてやねのかたがはだけにある雪  
風がかはしたハンケチ四角にたたみからたちの垣根の白いはな  
水量標と葦の芽、まひるの月が水にもある

加藤 裸 秋

(出雲崎にて)

里井 正 子

瀧山 重 三

雨露をしのぐ。

(五月三日)

×

一夜明くれば貴賓室、舞臺のかはるが如し、これも旅の一興。病院の集會所にて講演。それから大阪へ——。御堂筋の若狭屋にて、大阪の同人、翠江、冬樹、應香、信夫等と會。昔ぶりなる「夜の梅」にて薄茶一服。大阪の復興斯くの如し。皆打ち連れて甲子園に赴いて、坐談。それから神戸へ——。例の英之助居こと滴々亭の水音は昔の如くてきくとして滴つてゐることが嬉しい。神戸も、大阪のやうに、能く焼かれたものだが、滴々亭の一割は幸にして残つたのだ。しかも、土藏の裏へ出てみると、一ぼうの焼野原が須磨までさへぎる物なしである。俳諧の眞蹟其他、われ／＼の研究用の物も土藏の中に事無きを得たのは有難かつた思ひである。滴々の音に泊る。

(五月四日)

×

今日から歸り途。今日は大垣に下車、養老線に乗換へて石津下車。大江村の青史居こと輪中莊に入る。即興——

○

水の漫々たる堤をおりてつつじさく門内

○

師走木の股の富士へ大根干しとく

保育園とあつてふらここ、もみぢしてゐるのは散る

枝のゆらぐと見れば一羽来てゐる朝の安靜

聲は鳥の空を渡る月夜にて芽ぶく

もう春が芽ぐんでゐるなど青い月夜を行く

聲頃ひまな試験室の窓あけてせんせい、さくらの芽

月夜の海が、牛をなかせて通る

つきよびつたり木によつてハモニカふく少年

ふゆのかひがらのやうなはなかみのやうなはな、もくるる

をとこ孔雀の前でちよつとネクタイ直して去んで、動物園あき

ゆきに火のやうなりんごの皮を、それからりんごの雪のやうなと

こころしづかに病んでゐる冬ゆふやけの雲が金魚のやうな

雪の夜のよびりんおしてから花のやうにともるまでの時間と空聞

よびりんおしてからわたしの空間にゆきふつてゐる

みぞれふらしたくもの、日のさすあひだのちよつとせんたく

ここに一つの屋根妻のちちはは松の下畑

思ふとき思ふてゐてくれるとおもふまつぼたん

花のない壺とそのやうな或る日のこと妻に手紙

誰か國寶の鐘日曜さくらちる

ガラスにカネーが貼つてあり豆の花しづかなばかり

一羽来て啼いて、ないていつた散つてゐる

石が、春も散つてゐる

山のさくら門のさくら通夜にくる

豪華なさびしさ山が咲いてゐる  
坂ばかりの道が富士が見えたり櫻がさいてゐたり行く

平松星室

伊東俊二

五月五日は月も五日のつつじは白し

○ 寝つくまで蛙の句でも作らず灯は消さず

におく (五月五日)

×

朝早くより魚眠洞、輪中莊に來訪、午前

中、清閑を語る。青史曰く——「お、今

日は鳥が鳴いてゐる」と。蓋し、鳥は毎日

鳴いてゐるのだが、主人の心常に忙しくし

て、鳥の聲に耳をとめてゐる暇がないの

だ。それがいかにも今日は、鶯がのどかに

鳴き、行々子がすずしげに鳴き、青蛙まで

その楓の枝で鳴きはすのである。午後

から三人にて養老へ——。私は此の旅で新

緑も諸方で見えたが、この青葉若葉に

至り着いて、すつかり満ち足りた氣持であ

る。三人、手帳を手にして、瀧まで散歩。

めい／＼大分に鉛筆を動かしてゐるが、さ

て、その收穫は如何。皆々推敲未了、凡て

手帳の中に寝かしておく。千歳樓泊。

○ 青葉の夕明りは太筆に墨ふくませて、さ

て

○ 語りて水音、床はひとり次の間にのべた

といふ

(五月六日)

# 清 露 抄

萩原井泉水

梅がそつと開いてきて家がいつぱい日をあててゐる

筒井頼子

此の無邪氣——無心——無雜作——かう書くと、禪の公案のやうに「無」字になりさうだが……まつたく「無」の境地だと云つても敢て當らぬこともない。俳句といふものを勉強し、自然の見方を教へられ、表現の方法を習得し、いろ／＼と俳句らしい俳句を作つてみて、相當なところまで進んでの上に、それらの凡てを放下してしまふ、忘機といふ禪語もあるが、句を作るといふ自分の心を忘れてしまふ。さうした時に、ホツと生れ出るやうに出来る句——さういふ句が此句である。「家がいつぱい日をあてゝゐる」といふ言葉は天真そのまゝであつて、時として子供がかういふ書き方をするが、天衣無縫とも云ふべき妙味である。

此のへんどこからも見える富士學校にいかぬ子供遊んでゐる

鈴木折嶺

「此のへんどこからも見える」の下にポーズがあり「學校にいかぬ子供遊んでゐる」と讀むことは常識であり、誰も「富士學校」と讀む者もあるまいから、こゝにコンマを置く必要はない。私は此句を讀んで、冬田があり冬木が立ち、ぬく／＼とした日ざしを感じる。稻を刈りあげた跡の稻塚を背景にして、子供が繩飛びか、石けりで

もしてゐるといふ風景が眼前にほうふつとする。もつとも、これは私の個人的の味ひ方かもしれない。此句には季節の表現がしてないが、やはり、冬田とか雪晴れとか云つた風な感じをはつきり出した方がいゝのではないか、といふ評もあり得る。だが、私は此句としてやはり此位の方が結構だと考へる。

ある日はまだへふる雪うちの子供になれてゐる

重村雪人

窓の外は寒い雪に對して、家の中のほのかな暖かさ、しんじつの子供をもたない夫婦の物足りなさの中に、子供を貰つたことの新しいほゝゑみ、其子もしばらくは貰はれてきたままの落着きがなかつたものの、やうやく「うちの子供に」なつたらしいといふ安心——かうした家庭のかなり複雑な氣持が鮮かに單純化されて俳句になつてゐる。短歌ならば、もつと多くの言葉を用ひて現はし得ようが、その表現効果は却つて、此の句の短い表現に及ばないであらうとさへ思はれる。それ程、此句は寸分のスキもなく、一語の足りないところもないといふ位に、出來上つてゐる。こゝに俳句の表現技術の一つの見本がある、と云つてもいゝ。

面小手つけしもの取りしもの少年道場のうち

大越吾亦紅

何か元氣がはつらつと満ちてゐる空氣がひし／＼と感じられる、さういふリズムをもつてゐる。これは劍道の道場である。面と小手とをつけた者が並んでゐる。少し離れて、試合のすんだあとと面や小手を取つた者が並んでゐる、といふだけの場面である。さうだ、是だけの場面としては、脚本の地の文の一部みtainなもので、つま

らないではないか、と思ふ人もあらう。だが、一勝負が済むと共に、緊張が解けて、あらためて次の一勝負にかゝらうとする時の新しい緊張——それが殊に、若々しい少年達であることに於て、紅鯿のやうにピチ／＼とした紅顔の少年達であることに於て——こゝに詩がある。この瞬間の詩を感じるといふこと、而してこれをこのまゝの息づきに於て表現するといふこと——こゝに俳句がある。これは相當の老手でなくては能くせぬところの表現技術である。此句も俳句の味を即ち季節の味と考へてゐる見方からは、季節のないことと何か物足らぬではないか、と思ふ人もあらう。だが、私は此句としては、やはり此儘の方が結構だと考へる。

牛を買うて、山へいつしよに歸る子供たち學校がへり

松尾敦之

をぢさんが町で牛を買つて、其の大きな牛を歩かせてゆく、學校歸りの子供達がついてゆく。牛も山へ行く、子供達も山へ行く同じ道だ。物珍しさといふより、新しい友達を得たやうな親しさを以て、其牛を圍んで、牛と一緒に歩いてゆく子供たち。とき／＼、淋しさうにモーツと鳴いたりする牛。——子供たちの樂しげに、はしやぎながら行く姿。をぢさんは牛を手に入れた満足で、銚豆煙管をふかしながらニコ／＼して行く姿。——そんな光景がいかにも樂しく、朗かに描出されてゐる。をぢさんは一人、牛は一匹、子供達大勢だ。で、此句は此の子供達を主にして書いて、牛は客としてゐる。さうしてをぢさんの姿は子供達の中に隠れるやうに書いてゐる。此の技法がさう手際好く出来てゐる。「牛を買うて」こゝにコマがある。このコマ無くしては、これだけにふくらみのある描寫は出来ない。

川が草が雪のとけたあと

近木黎々火

大正十一年頃から、大さう短い句法があらはれて、其頃の錚々たる作家だつた放哉、裸木などが之を愛用し、一時は流行をなす觀すらもあつた。其時代の層雲句集には「短律時代」といふ書名を冠してもある。だが、これは時の流行ではない。短くあるべき句は短くあるのが自然であり、長くあるべき句は長くあるのが自然である。自由律の自由律たる所以はそこにある。事實も亦、短律の句が其時代だけで、影をひそめた譯ではなく、それから今日までずっと、此様な試作と研究とはつゞけられてゐる。で、形態の上では同じ風に見える短律の句でも、今から二十年以前の——

せきをしてもひとり  
蛙の聲の満月裸木

といふ風な句と、此の黎々火の「川が草が雪のあと」と云つた風とを較べると、内容的に、又、技術的に、如何に進歩してきたかといふことが、よく解る。殊に、此の間の作品に歴史的に目を通してきた我々には好く解るのである。

池が春のあめで木の中

北田山口彦

上に擧げた句と同じ傾向をもつた句であつて、境地も技法も相似てゐるとは云へる。然し、同じ様式だ、同じ形態だといふ風に評し去ることは出来ない。前のと此の句とは、それ／＼の個性をもち、それ／＼の持ち味を有してゐる。前の「雪どけ」の句は、——

體、雪が解ける時には、地上の物が凡て夫々の位置と形とに於て有るがまゝによろし、と云つた風な感じのあるものだが、かうした、いはばあたた任せといふ氣持が其句のリズムに出てゐる。又、此の春雨の句は、——一體、春の雨の降る日には、道でも木でも打ち霞んでゐる中に明るくて、外はさむくとして内に生命を孕んでゐるといふ風の氣分のあるものだが、此の氣合が此句のリズムに出てゐる。大體に打ち霞んでゐるのだから、こまかく目をとどかせて觀察するのではない、「池が——」そのポーツとした感じでよろしい。その池が「春の雨」のもこたる中に融け込んでゐる。さうして、それが春を息吹かうとしてゐる「木の中」にやはらかく抱擁されてゐる。すべて、内に孕んでゐるリズムなのである。

しべにさへや陽のあふるる

親井牽牛花

短律的表現の志向をはつきりと出した句である。こゝに書かれてゐる物象としては花(しべ)と太陽(陽)とだけである。花としては太陽の光に其の全き存在を委ね、太陽は此の小さな一つの花にも全き愛をそそいでゐる。太陽と花と、それだけで完全に充足してゐる一つの生命の世界——自然が生命として組織されてゐる一つの單位——さういふものをハッキリと擲んだのである。かういふ觀照と表現とは、あらゆる短詩形のうちで、俳句のみが能くなし得るところであつて、其故に、短律的表現といふものは、今後も大に研究されなくてはならぬものである。

浪音、月夜が屋根を重ねてゐる

龍山重三

「浪音」で切つて、それに折りかさねるやうに「月夜」と置いたりリズムは大そり手際が好い。又、句の上部は「浪音、月夜」と名詞を重ねて、重くして、句の下部は「屋根を重ねてゐる」と動詞をのびして、スラ／＼と物の疊んでほどけるやうに柔く書いたところも好い。今夜の浪音は月夜の浪音であり、今夜の月夜は浪音があふれるやうな月夜であるといふ氣持が「浪音、月夜」といふリズムで出てゐる。さうして其の月夜は、沖からは浪に浪が重つて寄せてゐるやうに、陸には月の光にぬれた家の屋根と屋根とが大きな浪のやうにつゞいてゐる。かうした風景が含む清楚な味といふものは東洋特有の紙と墨とに依つて表現するか、日本特有の俳句のリズムに依つて表現するか、此の二つしか其方法はないものではないかと思はれる。

浪がよせてかへしてただしく春になつてゐる

津田 笹彦

「たゞしく」は正しくであつて、「まさしく」と書いても好い、さういふ氣持である。「浪がよせてかへして」此の自然の大きな息づきの中に、冬は去り春は來り、さうして紛れもなく全く春になりきつてゐるのだ。浪はもの靜かに、しかも力強く、無始の過去から無終の未來にかけて動いてやまない、其の姿にしみじみと見入り、天地は今、空も海もたいとうたる一枚の光となつてゐる、其の春光に身を以て感じ入つてゐる氣持である。取材から見ると、蕪村の名高い句——

春の海ひねもすのたり／＼かな

と酷似してゐる。此の二つを並べると、世人は蕪村の句が古典的に先入主となつてゐる爲に、優先的に感ずることであらうが、これ

を冷靜に藝術的に批判をすれば、蕪村の句は概念的の嫌ひがある。春の海といふ季語的觀念を以て、浪の動きといふ自然をいかにも長閑なるさまに抽象化してゐる。こゝに如何にも俳句的ではあるが、俳句にしすぎてゐるといふ嫌ひがある。「浪がよせてかへして」の句は、客觀をそのリズムとして感じ、リズムとして書いてゐる。主觀をきはめて素直に平常の言葉をもつて述べてゐる。今日の私達にとつては蕪村の句よりも、此句の方がびつたりと共鳴する。

山、炭焼くけむりへ雲垂れきたる

大越吾亦紅

素朴なりズムである。此の句のよろしさはたゞ此のリズムの素朴さにある。畫に見れば、童畫のもつナイーヴな筆觸である。俳句といふものが「うまさ」を求めて進んでゆく上から——それは一つの文學としては勿論當然のことではあるが——とかく表現技術の「こまかい」藝を尙ぶやうになる傾向に對して、その行き過ぎを牽制する意味からも、一方にはかういふぼつてりとした、太い、ずぶといと云つてもいゝ位の味を保存し、さうして愛重することは肝要だと思ふ。私は上に「素朴」だと云つたが、それは初心的な、とか、無雜作な、とか云ふこととは違ふ。それとは正反對に、これは老練をきはめたものだ、又、かなり用意周到な氣持もろかがはれる。たとへば、太刀をもつてかぶとを割るといふ風な、一つの氣合が感じられる。引く息、吐く息の間に髪をいれないといふ調子である。と云つて、大上段にふりかざした武者振りが出てゐるやうでは、句としては甚だ滑稽なものになる。心の中の用意は如何やうであるにせよ、句としては、いかにも何氣無く爲おほせて、安らかに平常そのままの氣持で、膝に手をおいたといふ形でなければいけない。

い。それは古い言葉で云へば「無心所著」といふことに當るのである。

瀬へ木々のもみぢの一としきり散りあれて見ゆ

大越吾亦紅

同じ作者の句だけれども、此句は大分に感味が違ふ。表現の手法に、かなり繊細な神經がはたらいてゐる。然し、自然の見どころ、びつたりと眼を付けた其の構へと、視線の切り込んだ鋭さといふものには共通なものがある。吾亦紅といふ作者の姿勢といふか、風格といふか、その根本なものは一つである。川の瀬に紅葉が散つてゐる、それは川べりにある山の紅葉なのだが、或る時は風の立つままに吹きちらされ、或る時は風の向くままに吹き送られて、いかにも明らさまに散つてゐる。蕭々と……でもない、荒涼と……でもない。はつきりと明るくして且つ淋しいのだ。それはたゞ自然の生命が凋落する時に當つておのづから凋落する姿なのだ、平安朝の歌人は之を「しづこゝろなく」と詠つたが、「しづこゝろなく」では其見方が弱い、もつと内面的なきびしさであつて、同時に美しさでもある。それは萬葉の歌人の詠歎の中にきつとあると思ふが——今、適切な例歌を思ひ浮ばないが——とにかく此句には萬葉風な雄渾なリズムがある。此句に「風」といふ言葉は一つもないが、此句には風の動きが出てゐる。それから川瀬の流れの動きが出てゐる。全體に脈々とした動きがある。あまりにも動いてゐるが故に、ことさらに「見ゆ」といふ言葉を以て、それをじいつと靜かに燒きつけさせた。「一としきり」といふ言葉に對して、此の「見ゆ」といふ一語の働きには大きな力がある。

冬夜まどるの聲する教へ子の家のよこ通る

大越 吾亦紅

平常そのまま、生活そのまま。すつと口をおのづから流れ出た句、さうしてそのまま出来上つてゐる句。彫琢の跡は少しもなく、しかも一つのきずもないといふ風な、まる／＼とした感じの句である。作者は國民學校の先生なのだから、生徒の家はよく知つてゐる。その家へ行くのではない。たま／＼其家のある横を通る、家族同士で夕飯をすました後かなど見えて、樂しげに話してゐる、その中には教へ子の聲もする、何氣なく其を聞きながな通る氣持、此の氣持には、教へ子に對するあた／＼かな愛情がある。それが愛情だ、とはつきり自識したやうな愛情ではないところに、ほんたうにしんみりとした愛情がある。俳句といふものは、かういふ愛情をもつべきものだと思ふ。「冬夜」といふ感じも、じつくりとはまつてゐる。あまり、じつくりとして眺へ物のやうでもあるが、此句全體が素直であるために、少しもわざとらしい臭みはない。

からすあらしに堪へて高い松のさき、あらし

池原魚眠洞

一羽の鴉が強い嵐に吹きとばされさうにして、其の松の梢に取りついてゐる、一からす嵐に堪へて高い松のさき」でも一通りの句になる。大抵の作家は、こゝで筆を捨ててしまふ。それをさうせずして、更に「あらし」と言葉を添へた此の作者の句作意力を推賞したい。そこまで押して押してゆく力も、一つの技術力だけれども、それよりも先づ、そこをもう一つ押さうぜと構へてゆく氣魄力といふものが大事である。嵐は鴉を吹き、鴉は其に堪へてゐる、これは自然の力と生命の力との相撲だ、それが四つに取組んでゐる、取組ん

だまゝ動かないのでは、さつぱり生氣が無い、もう一つ其を揺がさうとする力が動いて來るので、「残つた、残つた」といふ生氣が生ずるのだ。その、もう一つ揺がさうとする力が、終りに置いた「あらし」である。コンマは其の氣合の間である。水を入れるほどの長い間ではない、ほんの瞬間の「靜」だ、「靜」と見るまに次の「動」に移つてゆく、その瞬間の「間」なのである。此の微妙な氣息の呼吸はコンマを使ふより他に手はない。

枝に鴉が秋の暮といつた一羽、に一羽がくる

池原魚眠洞

表現の研究の爲に、前句と似通つた取材と、似通つたりズムの句を出してみよう。作者は同じである。木の枝に鴉がとまつてゐる、秋の暮だ、これは芭蕉が既に句にしてゐる通りの如何にも秋の暮に相違はない、又、如何にも芭蕉的の風景ではある、と眺めたところに一つの感味はある。だが、これだけでは芭蕉の句であつて、創作にはならない。と思つて眺めつゞけてゐるところに、又一羽の鴉が來て、その枯枝にとまつた。そこで、此句のモチーフが出來たのだ。それならば此句の主體は、一羽に一羽が來て二羽になつた其の瞬間にあるのかといふのに、さうでもない。はじめに枝に一羽の鴉と秋の暮とを芭蕉風に感じてゐた氣持が一つ、その上に又一羽の鴉が來てその氣持に點睛した氣持が一つ、その二つが重つて更に一つのものに綜合されたといふ氣持である。一枝に鴉が秋の暮といつた一羽……「一羽に一羽が來る」この重ねた焼付けであつて、そこを句頭法としてのコンマが巧みに仕上げをしてゐる。コンマの後をテニヲハで承けるのは散文の文法には無い手だけれども、決して無理ではない。

北越暮春

萩原井泉水

○越前丸岡なる故内田創平方にて

ここに寝てゐて讀んでゐた本が一ぱい山吹の花  
 松の一枝山吹いけそへ未亡人としけふ三年  
 遺稿「裏庭」といふこれが其庭の春の行くころ  
 庭のその石つつつじさくそのまま句碑になる  
 出づると城の見ゆる入りて山吹いけてある一  
 うららかなりやよもぎのほしてあるなど佛前  
 やまぶきの花もう一夜といふまたくるといふ  
 (法榮寺墓參)  
 (四月三十日)

○蘆原温泉と其の途中

あちこち二三日は、やまぶきごろのけふはゆどころ  
 へやにもゆのかをるわかばけさはあめ  
 やまぶきの花蓮如忌へ舟のゆきかふ見ゆる  
 日本海から春になる風の由のせきれい  
 田に牛いれて南へく日のげんげ田みづ田

○三國の町と東尋坊

帯のほぼほどあるまちの旅で柳に雨のふる  
 かさはばかりて海は日本海の松にも雨  
 いはほにうしほのなんとしづかなけふが夏のあめ  
 この海のはたはた干したのを酒のさかなに海は雨  
 近江はげんげ田うみの見えると雨のはれてゆく  
 (五月一日)  
 (五月二日)



# 明月壇

井泉水選

うす雪ふつた田圃と鐵橋が町はづれ  
松村邦夫

まちに旅館の屋根ありこんぺきの雪晴れ  
夕もやおりてくる冬木のなかのあかり  
山葡萄からとつた葡萄酒で雪のふるのはしづかなものである  
朝は雪の山羊小舎へすめ来てをり山羊だまつてゐる  
街の雪から扉をおしてはいる郵便局は朝のしづけさ  
よるがつきよになると咲きかけてゐる梅の花かな  
牛をかこみ牛をあきなう雪山つらなり  
梶本芦城

寒菊しみじみ紅く寒に入る日近づく  
枯葉のやうな音してゆうびんがきた白い霜  
一輪さしてこの頃ずつと起きてゐられて  
空の星が家の灯が田の中の道歩いてゐる  
武田桂

膝にさす月の光の指と指とが遊んでゐる  
空が海のやうな白いベッドが舟のやうなけふも寐てゐる  
水が流れてゐるあしが芽を出してゐる  
遠くに雪山、清水の芹をつんでゐる  
鹽田正吾

日のさしてあさ冬菜に日あたたつてゐる  
薬家と鶏の二三羽と暮れるまへの水田の水

## 餘言

井泉水

冊末に「俳句を書く上で」と題して「告知板」のやうなものを田しておいた。これは「層雲俳句」の申し合せとして、どうか協力をねがひたい。

日本の國語國字の問題は、日本の文化を再興する上で、それも單に傳統を守護するといふのでなくて、新しい時代の日本文化を創造するといふ上で、目下のいちばん大切な問題だとおもふ。單に今日の用を足せばいゝではないか、といふのではすまない。自分は自分の使ひよいものを使ふのが自然ではないかといふのではすまない。これからの日本の爲である。次代の國民の爲である。將來の大きな自由を得るために、今日多少の不自由をしのばなければならぬとしたらば、我々は喜んで其の不自由をしのぶべきである。いな、それは決して「不自由」といふべき「ふゆくわい」なものではなくて、新しい發想と新しい記號方によつて、新しい思想をそだて、ゆく其の地ならしをしてゐるといふ「ゆくわい」さを感じずるにちがひないと思ふ。

水音流れてゆけば芽ぶいたのが咲いてゐる  
煙草のけむりののぼつては消えてゆくひとりなるかな

(夢郎氏居)

青 應 香

此の村の庭に赤い南天なんど寒くてお訪してゐる  
雨の日の子供雨だれとあそんでゐる  
梅の白い花の雨はれた海へでる道が一本

印 南 健 治

春の日の丘のなだらかな起伏も麥ふんでゐる  
あらし一日いよいよつるランプを灯す  
春の日舟より貰うた若布船の上に干してゐる  
雪やんだ月夜の船の上の雪捨ててゐる  
月があかるくて道木がくらくてかげあるいてゆく  
あすは出船のしづかな浪音とみんなねてからの宿のたばこぼん

眞野たける

月夜の月のあかるさはすこしはなれたしろい雲  
しらくもの島山の椎は花さかりかな  
ふきのと三つみつけた三つ手にして来た  
石、炎 える の は 枯 れ て ゐ る

櫻 田 悠 子

眼に見ゆるもの春だと思ふ程な癒えてゐる  
石に、せんせんと水のきよらかなせきれいでありその聲も  
栗の木ばやし の 眞 冬 の ほ そ み ち

増 田 折 莖 子

雪のなかの日がうごくふゆ  
那須の麓に住んで山ひだ雪深い朝な  
どこまでも水のない河原を子とゆく冬日  
雨がもう寒明も近くて梅の木の花の苔

篠 崎 早 男

二月は、桑の東ねたまの浮雲  
梅に早春の雨がはれると土産物屋の貝細工  
静けさ、とひとつの石を水の輪にする

私たち、そうとうに漢字の素養をもつて

ゐる者が、漢字をすてるといふことは、財産をもつてゐる者が其の財産をすてると同じである。文士や詩人の多数がこれに反對なのは、其の私情から云へばもつとものことだ。だが、問題は、さうした私情を越えて考へなければならぬことだ。さうしてまさに爲すべきことはすべからず今より爲すべし、といふ勇氣がなければならぬのである。然し、これは法律や命令をもつて強制的に出来ることではない、めい／＼が其の方針をもつてそれ／＼に實行することとに依てのみ出来ることだ。その上、これは急進的には出来ない。これを急進的に行へば、かならずや「こんらん」を生ずる。どこまでもぜんじに進む、漸進主義に依らなければならぬ。

で、「俳句を書く上で」といふ申合せでは、そのもつとも根本的の點を擧げて、こゝろもく風に書いたのである。

第一に、「耳できいただけでは解らぬ言葉は使はぬことにしませう」——これは層雲の句では、在來とても、私は選句の上で此のことを心にとめてきたから、今さら改めて注意するまでもないかとも思ふが、念のためあげたのである。一體、俳句は、

雜木山の雜木は紅葉してゐる中の松の木  
 燒け跡このごろ手袋して勤めに出る  
 少女よ白きガーゼのマスクの清潔な朝日であるよ  
 落ちて 梅の 雪の うへ 月夜  
 夕月は、梅の咲くおがんでゆく  
 雪のあとの静かな雨が宿屋の看板  
 豆の芽、ぼつちり、遠山雪ながら晴れてゐる  
 燒 あ と 傘 さ して ゆ く  
 ばたこばたこと水車、朝日さして来て  
 いつのまにか降りやんでゐる雪の、こころ製材所の音  
 雪山のまま春になる昔ながらの汽車が通ると牛が通る  
 冬空の風のないあしたのとうめいさが電線  
 女店を出してゐて花やで水仙の花を賣る  
 月夜が水を汲むので水音のする  
 陽が射せば春の日であり麥の芽であり  
 士の美しい夕日を牛のかへりゆく  
 水へ靱おとしてゐる夕やけてゐる  
 暮れれば月のあるほつとひらいてゐる  
 牡丹雪、炭 籠に火を入れる  
 みぞれになつて暮れてゐる海の汽笛  
 氷のとける豎となつて池が映してゐる  
 冬がことしあたたかい雨に鳥が尾をふつてゐる  
 みんな食べてしまつた皿の山水  
 家の中迄何か干してある日の中とらがらし  
 嵐残る朝の日射してゐる畑へ出る  
 松岡蒼兒  
 内藤英夫  
 堀切暮扇  
 石川舟洋  
 長谷川善一  
 小林秀洋  
 森景諫郎  
 矢島寒雄  
 清光寺 健

「詩」の一つであり、「詩」は言葉の藝術であり、言葉といふものセンスが詩の味ひなのであるから、詩が純正であればあるだけ、純粹に言葉を生がしたものでなければならぬ。即ち「文字」にたよつたり「文字」に助けられたりするものであつてはならない。だが、日本の今日の通用語そのものが、漢字によつて造られた言葉が多いので、同音の言葉が澤山に出来てゐて、耳だけで聞いては意味の紛れやすい言葉がずいぶんとある。かういふ言葉は俳句に用ふるのに、元來好い言葉ではないのだが、時としては、どうも他に適當な言葉がないために、俳句の中に取り入れてある場合もおう／＼ある。さういふ言葉は、うっかりと用ひないやうに、よく／＼吟味して、耳にきいただけで意味の解る言葉に改めて作ることにしようではないか。

第二に、「古い言葉はやむをえない場合のほかは使はぬことにしませう」——これは、俳句では、短歌とちがつて、古い言葉を愛好する程でないが、古い言葉には古い言葉の一種の味ひがあるために、チョイ／＼用ひられてゐる。この一種の味ひといふものを、私は全面的に否定はしない。いかに古い味ひを生かして面白いといふ場

梅のつぼみや朝はするどく鳥が来てなく  
枯穂つけたままの栗の木の雨がはれてゆくしづく  
霜どけする木が一本そこを赤い郵便車  
驚、眼を、あ、け、て、聞、く

澤木昭二

大山冬石

佐藤龍

辻村道鳥子

鍋島次男

永田二郎

廣田不知火

白石黙忍冬

星の林道を行く杉の暗さを行く  
てんびんゆさゆさ春が空がつづいてる道  
一啼き藪から冬田をわたつてひのくれ  
二人静かなことはひなたの柿の木に倚り  
流星のあかるい悔恨をもつ  
雀ちゆんときて夕日にちゆんちゆん、焼跡整理  
虹くもが巢をつくらうてゐる  
山も明るい道も月夜の枯草道  
阿蘇へ二月の雨はれてゆく野づら青み  
湯から出て山のむかうに月の出る山のかたち

合には、使つてよろしいと思ふ。これが、  
「やむをえない場合」に當る。だが、いま  
までは「やむをえない」と安易に考へてゐ  
た場合でも、それがしんにやむをえないの  
であるかどうかといふことを、今後は一さ  
らげんみつに反省したい。決して古い言葉  
の甘さにとろすいたり、古い言葉のまじ  
ゆつにげんわくされたりしないやうに、よ  
く／＼吟味して、まことにその古い言葉を  
使はなくては、その感じの出せないといふ  
場合ならばしんにやむをえないが、さもな  
いかぎりには、古い言葉は俳句の上では使は  
ないことにしようではないか。

第三に、「漢字はだん／＼に減らしてな  
るべく「かな」で書くことにせませう。――  
――卒直に云へば、漢字は全部やめるといふ  
ところまで押し進めなければならぬのだ  
が、いま其を早急に實行することは困難で  
もあり、又、混乱を生ずる。これはだんだ  
んと減らして行くといふ方針で、めい／＼  
が出来ただけ、読みやすいやうに、「かな」  
で書くといふ行き方を實行するのが一ばん  
手つとり早くて、實際的な方法である。『國  
民の國語運動連盟』では――私もその委員  
の一人であるが――必ず「かな」で書くべ  
き言葉をきめた。これも追て實行したい